

特別寄稿

長野県産マダイオウの標本（国立科学博物館蔵）を見いだす

藤井 伸二*・牧 雅之**

マダイオウ *Rumex madaio* Makino は、本州、四国、九州に稀産する日本固有の多年草植物である(北川、1982; Yonekura, 2006; 米倉, 2017)。産地記録は多いものの、かなり希少な植物であり、各地のレッドデータブックに掲載されている。長野県にも分布するとされていたが(清水監修, 1997)、以下で述べるように長野県における過去のマダイオウの記録はすべて誤認であった。今回、国立科学博物館における標本調査において、長野県下のマダイオウ標本を見いだしたので、ここに報告する。

これまでの各地のハーバリウムでの標本調査を通じて、雑種化したノダイオウがしばしばマダイオウに誤認されていることが明らかになっている(藤井・牧, 2017)。とくに、トガマダイオウ(ノダイオウとエゾノギシギシの雑種) *Rumex ×hybridus* Kindb がマダイオウに誤同定された例が多い。こうした誤認は、マダイオウが希少なためにその形態的特徴が十分に認知できないこと、ノダイオウ *Rumex longifolius* DC. と外来種との交雑によって形成された雑種分類群の形態が変異に富む(ときにマダイオウに似た形質を呈する)ことに起因すると考えられている(藤井・牧, 2017)。長野県において過去にマダイオウとされていた標本はすべてこのような雑種を誤認したものであり、これまでの調査で確実なマダイオウの標本を見いだせなかった(長野県植物目録編纂委員会, 2017)。しかし、伊那市においてマダイオウとエゾノギシギシ *Rumex obtusifolius* L. の雑種が見いだされたことから(藤井・牧, 2017)、この地域にマダイオウが生育していたことが推測される。

国立科学博物館の標本調査において、1930年に小泉秀雄氏が下伊那郡上村(現、飯田市上村)で採集したマダイオウ標本1点を見いだした。当該標本は若い果実の状態だが、花序の分枝および開出角

度、小花の密度とその付き方などから、マダイオウと同定された(本種の詳しい判別形質については牧・藤井(2017)を参照されたい)。なお、この標本は著者らが前回の標本調査を行った2009年には未配架であったが、その後の近田弘文氏による小泉秀雄コレクションの整理によって配架されたものである(海老原淳氏私信)。

先述の雑種マダイオウは伊那市で、今回のマダイオウ標本は上村で、それぞれ記録されていることから、伊那地域にはマダイオウが分布していたと考えてよいだろう。同地域でのマダイオウ現存個体群の探索を進める必要がある。一方で、マダイオウのような大形植物へのシカ食害はとくに顕著で、著者らのこれまでの観察では三重県南伊勢町および奈良県宇陀市のマダイオウ群落(どちらも約10~30株の個体群)はシカ食害が認知されてから数年~5年で絶滅またはほぼ絶滅状態となった。上村を含む南アルプス地域では、三重県や奈良県の状況よりもはるかにシカ食害が深刻なので、マダイオウ個体群の存続は厳しいかも知れない。本種の生育環境が山間の小河川や谷筋あるいは湧水地の流路沿いであること(藤井・牧, 2017)を踏まえれば、シカが寄りつきにくい人家裏の小さな沢筋を探索するのが有望だろう。

最後に、標本点数から見えるマダイオウの減少について記しておきたい。これまでの国内の主要ハーバリウムにおいてマダイオウを調査した結果、1969年以前に採集された標本が多く(検討済み標本106点中の70点)、1970年以降に採集された標本は少ない(36点)。こうした収蔵標本状況は、同属のノダイオウ標本が古い時代も新しい時代も同様に収集されていることに比べて(検討済み標本101点中1969年以前57点、1970年以降54点)、かなり顕著な相違である。マダイオウは、ノダイオウと同様に開花結実期には1mを越える大形の植物体となり、野外における発見は容易と考えられる。それゆえ、このような収蔵標本点数の違いは、最近の半世紀ほどの期間でマダイオウが急激に減少したとが示唆される。

* 人間環境大学人間環境学部

〒444-3505 岡崎市本宿町上三本松6-2

** 東北大学学術資源研究公開センター東北大学植物園

〒980-0862 宮城県仙台市青葉区川内12-2



図 小泉秀雄氏採集のマダイオウ標本写真 (TNS 所蔵)

a: 全体, b: 若い果実と花序, c: 新聞紙上に記されたメモ (マダイオウ, 14/6 1930, 上村).

謝辞

本研究を進めるにあたって、GMNH、HYO、KYO、MAK、OSA、TI、TNS、茨城自然博、三重総合博の各ハーバリウムとそのスタッフには標本の閲覧のお世話を頂いた。記して感謝する。本研究は科研費 24310168、26281051、16H04733 によって行われた。

付録：国立科学博物館所蔵のマダイオウ標本
H. Koidzumi 23337 (TNS906276), June 14, 1930,
Prov. Shinano, Shimoina, 上村

引用文献

藤井伸二・牧雅之. 2017. マダイオウと雑種ノダイオウの混乱. 長野県植物研究会誌 50:31-35.
環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室.
2015. レッドデータブック 2014 -日本の絶

滅のおそれのある野生生物- 8 植物 I (維管束植物). ぎょうせい, 東京.

北川政夫. 1982. タデ科. In 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫編：日本の野生植物草本 II, pp. 14-26. 平凡社, 東京.

長野県植物目録編纂委員会. 2017. 長野県植物目録—長野県植物誌改訂に向けてのチェックリスト—(2017 年版). 長野県植物目録編纂委員会, 長野.

清水建美 (監修). 1997. 長野県植物誌. 信濃毎日新聞社, 長野.

Yonekura, K. 2006. Polygonaceae. In: Iwatsuki, K., D. E. Boufford and H. Ohba eds., Flora of Japan Volume IIa Angiospermae Dicotyledoneae Archichlamydeae (a), pp.122-174..Kodansya, Tokyo.

米倉浩司. 2017. タデ科. In 大橋広好・門田裕一・木原 浩・邑田 仁・米倉浩司編：改訂新版日本の野生植物草本 4 アオイ科〜キョウチクトウ科, pp. 84-104. 平凡社, 東京.